

国語教育(読解指導)

松本 修

石原千秋は、国語教育・国語教科書への批評を行ってきたが、教室における学習での「読むこと」について、次のように述べている(日本国語教育学会『月刊国語教育研究』No.457 巻頭言「自由に読むこと」2010.5)。

国語における読書は「無茶苦茶に読むこと」ではいけない。何らかの根拠を、たとえ痕跡であっても、テキストの表現から示せなければならない。そしてその根拠から作り上げた「読み」を表明し、人を説得しなければならない。そこまでが、国語における「自由に読むこと」である。

読者論的な読みへの批判としてあった読みのアナーキズムに対する問題意識が、新しい学習指導要領における「交流」の重視を受けて、明確な形をとってきたと言える。読みの交流の成立のための条件については、松本修が整理を試みている(「読みの交流を促す「問い」の条件」『臨床教科教育学会誌』第10巻第1号, 2010.5)ほか、桃原千英子(「入れ子構造を持つ文学作品の読解」『Groupe Bricolage 紀要』No.28, 2010.12)、濱田英行(「小説の読みの対話的交流における「専有」」全国大学国語教育学会『国語科教育』第68集 2010.9)らによって、新たな臨床的研究が進んでいる。

こうした読みの交流のとらえ方は、さらに大きな視点から見ると、読まれるテキストを「メディア」という観点から把握し、読み方を相対化するリテラシー実

践として捉え直すという意味合いを持っている。今井康雄は、次のように述べている(今井康雄「メディアと国語と教育」『国語科教育研究』全国大学国語教育学会第119回鳴門大会発表要旨集 2010.10 課題研究1「『メディア』から国語教育の研究と実践を展望する」。他に、高木まさき、水越伸による発表があった)。

国語教育は、一方で(i)言語のなかで知覚の一定の様式を作り出し、他方で(ii)世界を描写することで言語への習熟を促進し、こうして「語る」ことと「示す」ことの間の特定の関係を言語に刻印する。

国語における読解の学習は、この(ii)の側面、すなわち個々の読みの方略を明らかにしつつ、言語的な検討によって対話による省察を導く機能を重視することで、リテラシー実践として再生する。

PISAショックが一段落して、改めて新しいリテラシー理論やメディア論を取り込みつつ、国語教育全体を見直すなかで、読解(や読書)の再検討が行われていくものと考えられる。

こうした流れの中で、「伝統的な言語文化」が小学校国語から位置づけられたことで、古典教材の読解も見直されることになる。山元隆春は、漢文の訓点・訓読の読むことにおける意味を問い直しているが、古典教材の指導理論の再検討を促すものとなっている(「漢文の訓点・訓読の学習指導の方法」全国大学国語教育学会編『新たな時代を拓く中学校高等学校国語科教育研究』 2010.12)。古典教材の読みも、広い意味でのリテラシー実践として把握されていくであろう。

(上越教育大学教職大学院)